



Title	M. Arnoldの詩について
Author(s)	上山, 政義
Citation	大阪外大英米研究. 1961, 2, p. 100-110
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/98934
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

M. Arnold の詩について

上 山 政 義

I 序

Matthew Arnold (1822—88) の詩についての比較的最近の研究の中で、我々の注目を惹くものの一つに、P. F. Baum 教授の “Ten Studies in the Poetry of Matthew Arnold”⁽¹⁾ がある。本文 136 頁から成るこの書はその title が示す如くに 10 項目の内容を含んでいる。すなわち 1. “Shakespeare” 2. “Mycerinus” 3. “Resignation” 4. “Tristram and Iseult” 5. Arnold’s Marguerite 6. “Dover Beach” 7. “The Buried Life” 8. The Two Laments 9. “Stanzas from the Grande Chartreuse” 10. “Empedocles on Etna” の 10 章であってこの中で 8 つの章までが Arnold の個々の詩についての研究である。我が国においても多くの読者を持つ “Essays in Criticism” や “Culture and Anarchy” などを含む幾多の著書を公けにして、秀れた essayist として定評のある Arnold は、同時に poet としても令名が高いことは今更言を俟たぬところである。彼は「詩は人生の批評である。」と喝破して、詩が単に修辞学的技巧を操つることよりも、人生の本質を探究し批判することにその意義を持つべきことを説いたことは周知の事実である。この彼が自ら作った詩篇の中で、彼の世界観と人生観を赤裸々に吐露しているであろうことは容易に想像されるところである。彼が公けにした詩については、C. B. Tinker 及び H. F. Lowry 両教授共編の “The Poetical Works of Matthew Arnold”⁽²⁾ の中に収録された数が長短取りまぜて約百数十篇に達し、500 頁に近い相当な分量を示している。従って、

1. Duke University Press · Durham, N. C. 1958
2. Oxford University Press : 本書では各々の詩について Arnold が発表後に加筆修正した経過を附註してある。

これらの詩を仔細に検討すれば、彼の思想の特色を端的に表わすものとして識者の注目を浴びているものと、必ずしも然らざるものとに区別することが可能である。前記 Baum 教授の著書は Arnold の詩全般についてではなく、教授が Arnold の哲理を知る上で、最も重要な地位を占めていると思考した詩について詳細な研究を発表している。つまり彼の詩の概括的な研究書では俚し得ない微に入り細に亘った論評を試みるのが Baum 教授の前記の書物を刊行した理由であろうと思われる。このことは、同書の Introduction の結び近くの次のような文から見ても明らかである。

The invaluable work of Tinker and Lowry — not to mention the many other traceable in M. Bonnerot's bibliography— has not only opened the way for fuller appreciation and understanding of Arnold's poetry, it has also left lacunae to be filled and opportunity for 'expostulation and reply.'⁽³⁾……

私は Baum 教授のこの書を通読して、採択された詩篇の数が僅少であるにも拘わらず、Arnold の思想の在り方を読者がある程度理解することが決して不可能でないと感じた。このことは論評の対象となった詩が、何れも彼の哲理を豊富に含蓄するものであったからに外ならぬものとする。そこで今私は本稿において、私なりの観点に立って、研究の対象を“Quiet Work”と“Shakespeare”の二篇に限定して、然も Arnold の詩を通じて見られる彼の世界観と人生観を、そのごく一端でも探究してみたいと思うのであるが、その方法論についても Baum 教授の書に負う所が大であったことをここに附記しておきたい。

II Quiet Work

Quiet Work という title の詩は、Arnold の詩集の Early Poems の中で sonnet を集めたものの一つであって、開巻第 1 頁に載せられているもの

である。この詩については、Tinker 及び Lowry の両教授共編の “The Poetry of Matthew Arnold”⁽⁴⁾ の中で次の如く記述されていることから見てその詩の果す役割は極めて重且つ大である。— It is clear that the poet regarded it as of primary importance with respect to his poetry and to his philosophy of life.⁽⁵⁾ また、この詩の成立の事情について、同書は次の如く述べている。

Among the many influences that may be detected here, such as that of Epictetus and of Wordsworth, Goethe's is certainly the chief.

As Mr. H. W. Paul pointed out, the sonnet was suggested by Goethe's 'Ohne Hast, ohne Rast'.⁽⁶⁾

即ち Goethe の詩から suggestion を受けて作られたものであることが指摘されているのである。

ところで、前述の通り Arnold はこの詩を極めて重視したので、最初に公けにして以来、度々加筆修正を加えたので、その first form と final form との間には甚だしい相違を生じるに到った。このような顕著な変遷は他の詩には殆んど見られぬ所であるので Arnold の思索の推移の過程を知る 便宜上これら二つの forms を次に掲げることとする。

First Form (1849)

Two lessons, Nature, let me learn of thee—
Two lessons that in every wind are blown ;
Two blending duties, harmonis'd in one,
Though the loud world proclaim their enmity ;
Of toil unsever'd from tranquility :
Of labour, that in one short hour outgrows

4. Oxford University Press 1940. 既出の The Poetical Works of Matthew Arnold と姉妹篇をなす。

5. 6. 何れも P. 22

Man's noisy schemes, accomplish'd in repose,
Too great for haste, too high for rivalry.
Yes, while on earth a thousand discords ring,
Man's weak complainings mingling with his toil,
Still do thy sleepless ministers move on,
Their glorious course in silence perfecting ;
Still working, chiding still our vain turmoil,
Labourers that shall not fail, when man is gone.

Final Form (1869)

One lesson, Nature, let me learn of thee,
One lesson which in every wind is blown,
One lesson of two duties kept at one
Though the loud world proclaim their enmity---

Of toil unsever'd from tranquility !
Of labour, that in lasting fruit outgrows
Far noisier schemes, accomplish'd in repose,
Too great for haste, too high for rivalry !

Yes, while on earth a thousand discords ring,
Man' fitful uproar mingling with his toil,
Still do thy sleepless ministers move on,
Their glorious tasks in silence perfecting ;
Still working, blaming still our vain turmoil,
Labourers that shall not fail, when man is gone. ⁽⁷⁾

さてこの二つの詩を比較してみると、先づ第1行目の two lessons が one lesson に変わっていることに気付くのである。この two から one への推移は、first form において、harmonis'd in one という修飾語句が附随していることから判断しても、この two lessons が全然別個の lesson を指示している

ものでないことは言を俟たぬわけであるけれども、読者に与える迫力という見地に立つならば、two lessons よりも one lesson の方が遙かに強力であることは何人も首肯するところであって、Nature から one great lesson を学びとり、その lesson の許に生活を律しようとする詩人 Arnold の厳しい世界観、人生観がこの詩を読む人の心を打たずにはおかぬのである。また、第6行目において、in one short hour から in lasting fruit に変わっているという事実は、“(man’s) far noisier scheme” よりも一段と大きく生成発展し、“repose” の中に完遂されて、急いで事を運ぶには “too great” であり、競争や対抗の具とするには “too high” であるという厳粛にして且つ深遠高邁なる Nature の labour; toil の持つ偉大な力を強調するのに役立っていると考えられないであろうか。またこの “earth” にあっては、数多くの “discord” が響き渡り、“man’s weak complainings” が巷に溢れていても、Nature の “sleeping ministers” は活動を停止することなく、彼等の “glorious course” を完成すべく、人間の “vain turmoil” を非難しつつ働きつづけるという万物を支配する神の摂理を描いた力強い表現は、“たとえ人間が居らなくなっても” 尚ほ厳然として継続すると叫破することによって、この上もなく崇高な荘嚴さを与えられているのである。Tinker 及び Lowry の両教授は “The Poetry of Matthew Arnold” の中で次の如く述べている。—The “thousand discord” and the “fitful uproar” of a revolutionary age have to do only with the relative, not with the absolute life.⁽⁸⁾ 即ち「この世の “discord” や “uproar” は全て “relative life” と関係はあるが、“absolute life” とは無関係である。」と。Arnold の時代と現代とは年代の相違があり、その間に世界情勢はもとより人間生活の諸相に数えきれない、そして測り知れない変遷が生じているわけではあるが、今日尚ほ不和や騒擾が Arnold の時代より増加こそすれ、減少しているとは考えられないのである。それ故にこそ、この混迷

8. P.22

した世相を波瀾から救済する方策としては、現代人が“absolute life”の本質に深く思いを致し、Nature のたゆみなき labour; toil に逆らわぬ行動をとることが極めて緊要であるという示唆をこの詩が与えている。

III Shakespeare

僅か14行から成る短い sonnet の中で英国史上類稀れな poet であり dramatist である Shakespeare の人物や業績を、Arnold がどのような表現で描いているかという問題は、我々の大きな注目を惹くところである。そこで先づ次に、この sonnet の全文を掲げてから論を進めることに致したい。

Others abide our question. Thou art free.
We ask and--thou smilest and art still,
Out-topping knowledge. For the loftiest hill,
Who to the stars uncrowns his majesty,
Planting his steadfast footsteps in the sea,
Making the heaven of heavens his dwelling-place,
spares but the cloudy border of his base
To the foil'd searching of mortality ;

And thou, who didst the stars and sunbeams know,
Self-school'd, self-scann'd, self-honour'd, self-secure,
Didst tread on earth unguess'd at. --Better so !

All pains the immortal spirit must endure,
All weakness which impairs, all griefs which bow,
Find their sole speech in that victorious brow.

頗る抽象的な叙述をされたこの短詩が難解な要素を数多く含むことは、この詩を一瞥する人々の多くが抱く偽らぬ感想であると言っても過言ではあるまい。実際このことを裏付けて、Baum 教授は次の如く述べている。――

9. Ten Studies in the Poetry of Matthew Arnold P. 1

No doubt many readers have thought they understood it, yet I have found, and still find, very serious differences of opinion among those whom I have consulted; —and so the way is open for a fresh attempt.⁽⁹⁾

然らば、どのような点で識者間の serious differences of opinion が見られるのであろうか。この事に関して、Baum 教授は Tinker, Lowry 両教授によって提起された三つの suggestions を基盤として問題点の解明に当たっているのであるが、究極的には主要な論点は、これらに要約されていると断定してもほゞ差支えないものと思われるので、本稿においてもこれらの suggestions を中心として考察を進めることにする。⁽¹⁰⁾

先づ第一の suggestion は、Clough という人の “the Universe” を “solve” しようとする努力に関連して、Arnold が彼に宛てて出した次のような趣旨の手紙である。

“I own that to *reconstruct* the Universe is not a satisfactory attempt either —I keep saying, Shekespeare, Shakespeare, you are as obscure as life is : yet this unsatisfactoriness goes against the poetic office in general : for this must I think certainly be its end.”⁽¹¹⁾

さて、Baum 教授の意見によれば、この文は「Shakespeare の人生に対する解釈は人生それ自体と同様に理解し難いものであり、従って、詩の目的が世界を改造することである限りでは、Shekespeare は十分満足できるものとは言えない。」⁽¹²⁾ ということを意味している。また Lowry 教授が上に引用した “I keep saying…life is,” という文を “really Arnold’s own paraphrase of his sonnet” と考えていることを Baum 教授は特に指摘している。⁽¹³⁾ このことから判断を下すならば、Lowry 教授は、この Arnold の sonnet が Shakespeare

10. 従って本稿で述べる三つの suggestions は何れも Baum 教授によって取り上げられた Tinker, Lowry 両教授の提起した suggestions である。
11. 12. 13. 何れも Ten Studies in the Poetry of Matthew Arnold p.1.

自身と同様に *obscure* であること仄めかしているとも取れるのではないであろうか。ところで、Shakespeare は宇宙の哲理を深く究明し、人生の在り方について豊かな示唆を我々に与えているわけであるが、人生が “*obscure*” であると同様に Shakespeare も “*obscure*” であるという Arnold の見解の底流を形成しているものは、如何に探究を進めても尚ほ且つ十分とは言えぬほどの深遠高邁なる思想が、その奥深く秘められているということに外ならないであろう。このことは、先に掲げた Arnold の詩の “*Spare but the cloudy borders of his base To the foil'd searching of mortality;*” という箇所を見ても明らかである。換言すれば、Shakespeare は *the cloudy borders of his base* のみを見せているのであるから、彼の劇に表現されている人生観、世界観の深奥に蔵されている彼の哲理を、我々が洞察力を十分に活用することによって、把握し会得すると共に彼の本質を見究めなければならぬことを Arnold の *sonnet*⁽¹⁴⁾ が説いているわけである。

次に第二の *suggestion* に目を移すと、これは the Yale MS の中における Arnold の鉛筆書きの *note* に関連したものであって、この中で Arnold は次のように自問自答しているという点である。

What would Shakespeare say “at seeing his easy morality erected by Germans & others into a system of life? → He would say— you fools— I have walked thro : life *επι ξυρου ακμη*⁽¹⁵⁾ God knows how --if you mistake my razor edge, you damned pedants, for a bridge, a nice mess you will make of your own & others’ walk & *cover*⁽¹⁶⁾ *versation*.

Tinker, Lowry 両教授は、今引用した Arnold の *note* について大要次の如く論評を下している -- Arnold は Shakespeare の劇の “*easy morality* に

14. 註10参照

15. このギリシャ語は、*it stands on a razor's edge* の意

16. 17. *Ten Studies in the Poetry of Matthew Arnold*. P.4 及び P.5

不賛成を唱えて、moral teaching を施すためには Shakespeare の説得力が不足していると考えているようである。その意味で Arnold は Shakespeare が “how to live” を我々に教える責任から “free” であったし、我々自身の “walk & conversation” に対して何らの “help” をもその劇が提供していないが故に、彼が “obscure” であると考えたのであろう。しかしこの “free” と “obscure” は “natural meaning” 以上の何か加わったものであって、この点に注目しなければならない。ところで、ここで特に注目すべき事柄は、easy morality という語である。この語については色々な観点に立って、様々な考察が可能であるし、軽々しい断定は厳に戒めなければならぬことは言を俟たない。しかし私は次のような見解も成り立つのではないかと考える。即ち、Shakespeareの手になる数々の劇詩は、comedy たると tragedy たるを問わず全般的に物語の推移を通観すれば、変転極まりない人生行路の随所に繰り広げられる人間模様が豊かな天分を以て描写されている。そしてそれらの劇詩の展開を推進し、物語を終結に導くに際して Shakespeare の脳裡を常に去来する一貫した morality があるものと想像することが許されると思う。さて、宇宙万物を支配し、その運行を司どる働きをするものとして、概念的に Providence の存在を認めるとすれば、この Providence と Shakespeare の morality の間には一脈相通するものがあるべきではないであろうか。然るに、この Providence の支配下にある人間界の諸々の事象の複雑多岐な様相が、現実には Shakespeare の morality を以てしては律しきれぬ場合が存在すると考える余地があることを感じざるを得ないのである。かくて、このような morality の在り方が、やゝともすれば easy に流れているのではないかという点に第二の suggestion の問題点があると思われる。即ち Shakespeare の劇詩は喜劇的終末を告げたり、あるいは悲劇的大団円を見せるわけであるが、物語の経過及び結末の仕方において、実際の間人生活の呈している姿と対比してみると、Shakespeare の morality が “how to live” という深刻な課題を教えるには必ずしも万全とは断定できないのである。ここに Shakespeare

の morality が easy であり、また彼の劇詩が真の意味では必ずしも我々に morality を完全に教えてはいないという理論が成立すると思われる。然し古今独歩の秀れた詩人であり、劇作家である Shakespeare に対する評価の仕方として、これは余りにも僭越であり Shakespeare の真骨頂を認識していないという反駁が当然予想されるところであって、必然的に次の第三の suggestion が提起されている所以も実はここに存するのである。

さて、第三の suggestion ⁽¹⁸⁾ は Tinker, Lowry 両教授の書に述べられた次の文と密接な関連がある。

The mood and ideas of Arnold's early poetry often reflect his reading of Emerson. The conception of over-towering, lonely genius here expressed is a familiar strain throughout Emerson's essays. At the close of his essay on "Intellect", for example, Emerson pays tribute to "that lofty and sequestered class" [he is here speaking chiefly of philosophers] and "the innocent serenity with which these babe-like Jupiters sit in their clouds, and from age to age prattle to each other, and to no contemporary." ⁽¹⁹⁾

上の引用文で明白な如く、Arnold の sonnet は Emerson の思想に影響を受けたものと想像される。孤高の風格を具えた哲人 Emerson の叙述法を Arnold は Shakespeare を描写した sonnet の中に取りたものと思われるがその中で最も注視に値いするのは "prattle to no contemporary" という箇所であろう。使用した字句を異にこそすれ、意味内容においては、Arnold の sonnet は主としてこの語句を敷衍したのとも解されるのである。

そこで問題は Shakespeare ほどの傑出した人物が何故に在生中に世人からその才腕を認められなかったかという点に移るわけであるが、その原因については当然種々な推測が可能であり軽々しい断定は何人と雖もなし難いところで

18. 註10. 参照

19. The Poetry of Matthew Arnold P.26

あろう。例えば政治家の業績の真価が後世史家の批判を仰がねば判明しない如くに、文学作品もまた幾時代にも亘る識者の洗礼を受けた後でなければその良否が判然としない場合があることは自明の理である。しかしこの問題について、Arnold の見解に臆説を逞しうすることが許されるならば、Shakespeare の真実の生い立ちや経歴が判然としないことと、彼の心奥に潜む深遠なる哲理が世上一般の人々に理解し難いものであったために、必然的に彼の劇詩もその真価を認識されるに到らなかつたからではないであろうか。上に理由として掲げた二者の中で前者は、通俗平凡な考え方であるという誇りを免れないことは勿論であるが、素姓が定かでないということは詩人、劇作家として世に認められる上で不利なことは争えない事実であつたらうと推察されるところである。次に後者の理由についてであるが、Arnold がその sonnet の中で Shakespeare を “the loftiest hill” と呼んで、who 以下 3 行に亘って附した修飾語句を見ても明らかなように “mortality” の手にとどかぬ遙かな高所に位置を占める存在として扱っている。従つて当時の社会で appreciate されるには彼の思想が余りにも深遠にして高邁であつたということが、Arnold がこの詩を作成するに當つて彼の念頭に浮んでいたと思われる。然しながら、この茫莫たる描写を伴つた sonnet を書くに際して Arnold の胸中に如何なる思いが去来したを正しく推測することは容易ならざる企てであつて、私は今後更に研究と思索を重ねて Arnold の哲理の解明に精進したいと思つている。